

ま え が き

立命館大学の総長、末川博氏は京都の三高時代、人間として生きることの意味や死について思いつめ、自然の中で自然と共に生きることが最善であるという結論から郷里に帰り、薪を切り、麦の手入れを毎日やったことがあった。ところがやがてこれでよいのか、生涯百姓をやることが自分の天分であるのかどうかとはんもんしだし新しい不安におそわれた。

うかとはんもんしだし新しい不安におそわれた。

そんなときおじ伯父といとこ従兄の死に直面した。

口や筆では表現できないが人間が考え思うこと、動いたり行なったりすることは絶対的というべき限界があることに気づき、身を修めてもってそれを待つ、命をたつゆえんであるという心境に近づいたとの回想文を読んだことがある。以来これまでの受け身の立場で自然とともに、自然の中に生きるという姿勢から抜けだそうとする新しい意欲と情熱が湧いてきて、以前考えていた思索や思弁だけでは人間は生きてゆけない厳しい現実がそこに存在することがわかってきたと結んであった。

教育研究と同時に実践にもたずさわる私たちとしては、その研究を子どもの教育に具現するための努力をする一このことがもっとも大きな責務となってくるのではないかと思います。

NHKの“竜馬がゆく”を見ていたらこんな場面があった。父の死を知らせる書状を早飛脚で受け、人前では悲しみを隠した彼が、死線をさまよう意識の混濁の中で竜馬の名を叫んだと記されていることから父の深い愛情を感じひとりになってから少年が示す純情さで、その死を悲しみ惜しんで泣くのである。

それからの彼は以前にもまして、剣の道に励み、ついに免許皆伝に到達するのである。こうなると悪条件必ずしも悪くはないのだともいえる。

心理学ではこれを昇華という。すべてがこうなるのなら苦労はないが、竜馬はひたすら自らを修める道を進むわけであるけれど、どうしてそうなったかの説明は難しい問題である。

県警の資料によると、非行のピークは義務教育段階をはるかに越して高年令の少年層に移動した。したがってこれからは今まで以上に高校段階においても・・・能率の高い人間の開発に、そして問題性のある生徒の指導と治療に・・・いっそう努力しなけりゃならなかったようである。

教育相談部は竜馬が示す無限の発展を秘めた人間そのものを課題にしておりこの点からも私たちは責任の大なるを感ずる次第である。

ここに収録した六編の研究は、教育、心理、社会、哲学等の分野の広がりについていどむものとしてまさに^{とうとう}^{おの}郷の斧のようなささやかなものであろう。しかし多くの先輩、学兄諸氏の指導激励により、私たちの前進の足がかりとなるとともに、多少とも関係各位のご参考ともなりうれば幸である。

おわりに研究に協力していただいた多くのかたがたに厚く御礼申し上げる次第である。

なお、この研究集録は旧教育研究所で発行した研究紀要60集の継続であり、本年はそれが教育相談編と教育研究編として発行されたものであることを付記しておく。

(理科関係の研究集録も同様な立場から理科研究編(1)および(2)として発行した)

昭和43年3月

新潟県立教育センター所長 大黒山 平